

歌集

蝓
蛄

小澤朝一

歌 集
蝮 帖

昭和四十七年十月十日 発行
昭和四十七年十月十五日 印刷

定価 一、二〇〇円
一四〇円

著 者 小 澤 朝 一

埼玉県南埼玉郡菰蒲町

大字上栢間三、四三八

郵便番号 三四六〇〇一

発行者 伊 藤 幸 子

東京都練馬区中村北四ノ一五ノ一八

発行所 新 星 書 房

電話（九九九）四六八五番

振替 東京八五〇六二番

序

小沢朝一氏がどのような人生を経て来られたか、また現在の生活がどのような営まれているか、さらには作歌がどのような態度・方針のもとに行なわれているかについては、本書の「あとがき」に心こまかに記されている。

小沢氏とは近年の交わりで、折々の会話にほぼ見当はついていたが、このたびこの一文を読んで、一層はつきりと知識を得ることができた。立派な文章だと思った。この歌集をひもとく人々も同様の感を覚えることであろう。私よりは多少年長であるが、ほぼ同世代人であるためか、身に沁みるものがあつた。

小沢氏は若いころから、おそらく短歌の愛好者であつたにちがいない。

しかし作歌には踏み切っていなかったが、長い教職から退いて自由な時間をもてるようになった時、あたかも流れの堰を切ったように作歌生活が開始された。「あとがき」には、短歌とのめぐりあいや、近年の作歌動機などについては触れていないが、他日これらの点についても書かれることもある。いずれにもせよ、現在の情熱的な打込みかたは、ひとかたならぬものである。第二の人生ともいうべき時期にはいつて、小沢氏のように作歌活動をする人々が、私の周囲にも数多く見られる。小沢氏をわが同志と思う人々は少くないはずであるが、その中でもきわめて熱意に燃える一人と私には思われる。

小沢氏は生地埼玉県菖蒲町で四反歩の田畑を保有し、老夫妻で農耕をつづけているという。季節のものである手作りの苺や椎茸などを持参される日焼けた顔を見ると、ひそかに羨ましい気持を覚えるのが常である。おそらく自家用の米や野菜、鶏の卵、四季の草花などは収穫しているので

あろう。「遊びのようなものです」と言うのは、周辺の専業農家をもってのことであろう。

歌集の中には、このような生活事情から大地に親しむ短歌が多い。しかし小沢氏の作歌態度には、「あとがき」で知られるように、郷土の変貌してゆく自然に寄せる愛惜の情の深いものが、一本の柱となっている。土地の開発が急速で、江戸時代以来の運河、用水、沼などは、ほとんど消滅に瀕しているようである。幼いころからの記憶に生きる郷土の変貌を思うと、わずかに面影をとどめる現状も、近い将来に消滅するであろうし、変貌した現状もまたさらにどのようなようになってゆくか、想像を超えよう。小沢氏が自然を対象とする短歌は、東京に近い関東平野の一地域の記録性をもなうであろうし、そのような意味で今のうちに積極的に詠んでおきたいと考えている。郷土の人のこの意欲に私は敬意を表したい。

小沢氏の作風は、心も言葉も素直である。これ以上に素直にはなれない

と思わせられる。この数年、私は読みつづけているが、作風は一向に変らない。これは人柄に根ざすのであろうが、すくなくとも作歌にむかう態度として、頑強に持ちつづけようとしていることは、たしかなる事実である。ときには物足りない感もいだいたが、このたび一卷にまとめられた短歌を通読して、立派だと思った。集中にはこの一線上で、すぐれた作品をかなりなまでに持っているのである。読者はそれらを必ず認められることであろう。変貌してやまない現代の自然に対しても、作者はいつも在るがままの眼前の自然に心をかよわしている。批評精神をはたらかせたり、あらわに悲しみや怒りを表現しないのである。これはできにくいことで、私が素直という言葉でいう内面には、この要素があるのである。自然以外を対象とするときも、このことは同様である。

三年間に小沢氏が「まひる野」に歌稿として提出し、活字となったものは多くはないが、実際の作歌数は収載歌の四、五倍はあるようである。そ

れを自選したのがこの歌集である。私は一首も消していない。多少、筆を加えただけであるから、すべては著者の実力を語るものであることを、ここに記したい。小沢氏はこのことを、ひそかに希望もし、よろこんでいられよう。私も通読後、安心感をうれしく味わっている。

また、歌集の編集も著者によって独創的に試みられたもので、現在の作品を分類するのに最もいい方法と考えられたであろうし、私も賛成である。これからも健康にめぐまれ、ますます作歌に情熱は注がれよう。今後この編集形式にもみずから束縛することなく、歌境をひらいてゆかれるように期待してペンをおく。

昭和四十七年六月

窪田章一郎

目次

序

窪田章一郎

新年詠草

一一首

昭和四十四年

七

昭和四十五年

六

昭和四十六年

五

寒の歌

二六首

雪

五

冬空

六

日当り

三

春の歌

三三首

はだれ雪

四ッ手網

若葉

咒 罨 亮

夏の歌

二四首

早苗

青田

稲妻

空 戾 盞

秋の歌

四六首

稗

蟪蛄

舌 衮

棕鳥

山茶花

武蔵水路

冬の歌

冬の雨

赤城おろし

野の鳥

農の歌

春めきて

畚

田植

田の草取

二七首

六一首

五

六

七

八

九

十

九

二〇

二一

二二

妻病みて	うからの歌	生き物の歌	冬	秋	夏	春	花の歌	冬の眠りに	稲刈	茄子
	六一首	八二首					三九首			
一五		一四	一五	一三	一六	一五		一九	一六	一三

あとがき	雑歌	挽歌	嫁	吾子ら	妻	幼子	孫	嬰兒
	六五首	一五首						
三三	二五	一七	一五	一六	一六	一八	一七	一七

螻

蛄

